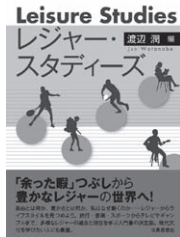


# レジャー・スタディーズ

(世界思想社 2015 年)



吉 成 順

私が渡辺ゼミにお邪魔していたのは2010年から12年のことである。卒論も修論も、そして当時進行中の博論もずっとマンツーマンで指導を受けていた私は、いわゆる「大学のゼミ」らしいものを体験したことがなかった。大学の教員になってから、結果的に自分を中心に学生が数人集まってゼミらしきものができたことはあっても、いちゼミ員として「大学のゼミ」に参加するのは、渡辺ゼミが初めてのことだった。最初は博士課程の単位を埋めるために（ごめんなさい）訪れた渡辺ゼミは、私にとって異文化体験と言っても過言ではない、たくさんの刺激に富んでいた。文化や社会という視点に共通点はあるとしても、それぞれ多様な研究テーマを抱えた、世代も立場も違う人たちが、毎週、自分の仕事を終えた後に研究室に集い、議論を戦わせる様子は、とても新鮮だった。

『大学院で学ぶコミュニケーション学』（2012）に寄せた文章の中で、渡辺先生ご自身が書いておられる。「大学院の演習の時間には、僕の研究室は毎回十人を超える人たちがでにぎやかです。すでに院の課程を終えた人たちが毎週やってきますし、参加したいとメールで問い合わせきた人たちもいます。その人たちがそれぞれ、現

在の関心事や研究テーマについての報告をしますから、話題は盛りだくさんで、白熱した議論になることも少なくありません」。まさにその中に、私も身を置くことができたのだった。

面白かった。なにより、居心地が良かった。数年前、勤務先の改修工事が終わって自分の研究室で授業ができるようになったとき、あの雰囲気や少しでも再現できないかと思って、机の上にお菓子の籠をおいた。もちろん、お菓子があるから居心地が良かった訳ではないことは分かっているのだが、形だけでも真似してみたかったのだ。研究室という空間の居心地を良くする「ゆとり」というか「遊び」のようなものとして。

「ゆとり」や「遊び」は、余計なものではない。車のハンドルにも「遊び」は必要だ。まして人生に於いてをや。人生における「ゆとり」や「遊び」を「レジャー」といい「余暇」という。しかしそれが学術研究の対象としてきちんと位置づけられたのは、そう古いことではない。「余暇ツーリズム学会」の前身「日本余暇学会」が創立されたのは1973年だが、10年足らずで休止、その後1990年に復活する。日本人がエコノミック・アニマルと呼ばれた時代にレジャ

一研究の必要性が認められるようになったものの、世間がバブルを謳歌する中では盛り上がりず、バブル崩壊後の危機感の中でようやく再認識された、ということだろうか。大学の授業科目として位置づけられたのは、ごく最近だ。

渡辺先生のさっきの文章は、こう続く。「[渡辺ゼミの] そんな人たちと最近共通のテーマとして勉強しているのは、『レジャー・スタディーズとツーリズム』です。レジャー研究は『カルチュラル・スタディーズ』では、大きなテーマの一つになっていますが、日本では必ずしも活発ではありませんでした。しかし労働やツーリズムとの関係は、追いかけたらおもしろいテーマです。その成果はやはり、本として発表するつもりです。」

それが本書『レジャー・スタディーズ』(2015)なのである。

そういえば、私が渡辺ゼミにいた最後の年に「レジャーとツーリズム」と題した特別講義シリーズが企画され、私も1回担当させていただいた。現代のさまざまなレジャーについての話題が並ぶ中、私だけが古いロンドンの話をして、場違いかもと心配した覚えがある。この講義シリーズが、本書にいたる共同研究のきっかけとなったのだろう。特別講義の分担者と本書執筆者を較べるとかなり一致している。もちろん、全体の構成はさらに練り上げられている。前半では日本余暇学会復活の立役者である藺田碩哉氏や文化社会学の重鎮である井上俊氏、そして渡辺先生本人によって理論的な導入が行われる。若手研究者を中心に現代におけるレジャーの諸相が描かれた後には、「ミュージアム」や「ギャンブルとセックス」といった、特別講義にはなかったテーマも追加されている。

大学の授業で使うことを想定し、全15章にまとめられた内容と執筆者は次の通り。

序. レジャー・スタディーズの必要性と可能性 [渡辺潤]

Part 1 余暇学からレジャー・スタディーズへ (1. 余暇 [藺田碩哉] 2. 遊び [井上俊] 3. ライフスタイル [渡辺潤] 4. 仕事 [三浦倫正] 5. カルチュラル・スタディーズ [小澤考人])

Part 2 レジャーの歴史と現在 (6. 娯楽と教養 [加藤裕康] 7. ツーリズム [増淵敏之] 8. 音楽 [宮入恭平] 9. ショッピング [佐藤生実] 10. スポーツ [浜田幸絵])

Part 3 レジャーの諸相 (11. ライフサイクル [盛田茂] 12. 食 [山中雅大] 13. 映画とテレビ [盛田茂・加藤裕康] 14. ミュージアム [光岡寿郎] 15. ギャンブルとセックス [岸善樹])

特別講義と同じ2012年に、渡辺ゼミでは「学生向けに論文の書き方をまとめよう」という話もあった。夏ごろからみんなで意見を出し合い、原稿を披露しては叩かれて書き直す、という作業が続いて、翌春『「文化系」学生のレポート・卒論術』として出版された。「レポートの書き方」を装いつつ、実は幅広い文化研究全体の入門書でもある。議論と執筆の過程は、漠然と捉えていた知識を深く掘り下げて理解する、得難い機会となった。

このように具体的な成果を形として残していくところが渡辺ゼミの素晴らしいところ。そしてそれを支えているのが、研究室の居心地の良さなのだろうと思っている。